

平成二十五年六月十日発行
皇學館論叢第四十六卷第三号 抜刷

資料

岡平保『播磨風土記考』翻刻（上）

近藤左知子

岡平保『播磨風土記考』翻刻（上）

近 藤 左知子

東京大学史料編纂所には『播磨風土記考』と題する謄写本が所蔵されている。著者は岡平保。彼は、文化三年（一八〇九）、播磨国室津（兵庫県揖保郡御津町）で代々室津加茂神社の祠官を務める家系に生まれた。祠官として奉職するかたわら、姫路藩士の小屋左次右衛門のもとで和漢の学を修め、のちには本居内遠について国学を学ぶなど、学問に取り組んでいた篤学の士で、古典に関する著作もある。

『播磨風土記考』は、この岡平保の著作の一つで、『播磨国風土記』に注釈書である。本書が注釈の対象としている『播磨国風土記』は、谷森善臣が嘉永五年（一八五二）に、三條西家本を書写してはじめて世に出たもので、他の現存する常陸・出雲・豊後・肥前の四風土記と比較して伝播が遅く、研究も進んでいなかった。

『播磨風土記考』の奥付には、「安政六年（一八五九）己未三月十一日」とあり、谷森善臣が『播磨国風土記』を書写してから約七年後に書かれたものであることがわかる。その後、文久三年（一八六三）に栗田寛が『標注播磨風土記』をあらわし、やがて明治四年（一八七二）には敷田年治の『標注播磨風土記』も登場するが、『播磨風土記考』はこ

れら二書よりも早くに成ったもので、同書は『播磨国風土記』の最初の注釈書である。

ちなみに、敷田年治が『標注播磨風土記』を執筆する際に、岡平保の協力を得たようである（同書跋文）、その後の研究にあたえた影響も少なくないのである。

『播磨風土記考』は、未刊で原本も存在しないが、幸いなことに、明治二十二年（一八八九）に重野安繹によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている。そこで小稿では、東京大学史料編纂所所蔵の岡平保『播磨風土記考』（請求番号二〇四一・六四一五八）の全文を翻刻し、風土記研究者の利用の便に供したいと思う。翻刻の方針などは【凡例】に示した通りである。

なお、著者岡平保の履歴や同書の成立については、べつに『史料』二三八号（皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所所報、二〇一三年六月）掲載の「岡平保『播磨風土記考』について」で詳述したので、こちらを参照されたい。

このたびの翻刻にあたっては、皇學館大学文学部教授上野秀治先生に御教授を賜った。末尾ながら誌上に特記して謝意を表する次第である。

【凡例】

一、本稿は、岡平保『播磨風土記考』の原文およびそれに附された頭注・附箋を原本の体裁にならって翻刻したものである。

一、漢字の字体については可能な限り謄写本に忠実となるように翻刻した。

一、風土記原文は一一ポイント、『播磨風土記考』本文および附箋は九ポイント、頭注は七ポイントをもって組版した。なお、原文における割注はへゝに括って七ポイントで示す体裁に改めた。

- 一、読者の便宜を考え、句読点および中黒を施した。
- 一、頭注は、一括して巻末に掲げることにした。
- 一、今回の翻刻では、すべての頭注に対し、原本にはない注番号を附し、注との対応をあきらかにした。ただし、頭注によっては、かならずしも厳密な対応でない箇所もある。
- 一、附箋については各注釈対象ごとに末尾に四字下げにして挿入した。
- 一、附箋の体裁は、できるだけ原本に忠実となるように組版した。なお、改行については、特に必要ないと判断した箇所は追い込みとした。頭注についても同様とする。
- 一、本文中には「○」や「△」といった、注の挿入を示す符号が用いられている。可能な限りそのまま採用した。
- 一、ルビ・書き入れ・朱筆などはできる限り原文の体裁にならって施した。
- 一、原本の巻末には袋綴しの形で関連地図が掲げられている。今回の翻刻では組版の都合上、見開きの形で掲出した。

賀古郡日岡

故号_二日岡_一此岡有_二比礼墓_一云々は、故号_二日岡_一於_二此岡_一坐神者曰_二大御津齒命子伊波都比古命_一亦有_二比礼墓_一所以号_二褶墓_一云々などありたるにはあらぬか。さて記中巻に於針間國氷河之前居忌筥而云々とあれと、今氷河といふ河なし。これによりて十年はかりさきに考へたるものあり。そのよしかきつく。抑式の神名帳に、賀古郡日岡坐天乃伊佐々日子神社と載られたり。されと今日岡の御社といふはなくて、加古郡加古川村より二十町はかり北に大野村といふ村あり。此村の北なる山に日向大明神と称へ奉れる御社あり。〈加古川の流よりいとくちかし〉是や日岡坐天乃伊佐々日子神社ならんとそおもはる。そのよしは、ヒノヲカを後にヒヲカといひて、其ヒヲカをヒウカと訛りて、終に文字さへ日向に成たる物ならん。猶さはなくとも日向と日岡とは文字の形もよく似たれば、誤れるにてもあらん。然おもふにつきて、此御社にまゐりて別當多聞院(朱筆)かりゆきて尋ぬるに、多聞院のいはく、此社は延喜式神名帳に日岡坐天乃伊佐々日子神社とある社にて、むかしは日岡と申候を、いつの比よりか日向大明神と申ならし候。去ながら、祭神は伊佐々日子神にてはなし。吉備津日子命にて候。是のみ不審に候といへり。まことに我思ふよしに、いさ、かも違はさりけり。かれつらつら考ふるに、此あたりの旧き地名を比といひて、その比といふ處の岡なるによりて、比能乎加とはいへるものならん。さらは氷河も此比といふ所に流れたる川なるによりて比能加波とい、たる物ならん。然る時は此加古川やかて氷河なり。また伊佐々日子神は記に伊佐勢理毘古命(紀二八五十彦彦命)とあれは、此御子の事なるへし。〈神名帳にはかゝる類をりくあり〉此皇子は大倭根日子賦斗邇命(孝靈天皇)の御子に坐て、はじめの御名は伊佐勢理毘古と申し、を、吉備國を言向和給ひしによりて、大吉備津日子命と御名お

ひ給へり。〔多聞院の伊佐々日子神にてはなく、吉備津日子命にて候といへるは、かゝるよしをしらていへるにて、やかて同し命のことなり。さてまた唯に吉備津日子命といへるは、若日子建吉備津日子命とまきはししけれど、是は人みなもいふ事にて、吉備中國にますをも唯吉備津日子命といへれば、それとおなじ類にて、是も大吉備津日子命の事なりとおしはからるゝなり〕

天皇問云。是誰犬乎。須受武良首對曰。是別嬢所養之犬也。

今飭東郡三野庄の内に、上鈴村あり。又本郷郷の内に中鈴村あり。継庄の内、見野村の小名に下鈴といふ處もあり。是か。〔継庄継村は姫路より方一里はかり。本郷村は辰ノ方一里十五丁はかり。見野村は辰ノ方一里十丁はかりあり。因にいふ、次々道法を奉たるに、何方よりもいはざるは、みな姫路よりなり〕

【附箋】

南毘都麻、是は万葉にみえたる伊奈美婦なる事は、論ひなけれど、今此邊といふ事はしれし。さて名のよし南毘は稲日にて、都麻は神留などの留にて、稲日大郎姫の留り居る嶋といふ意か。

【附箋】

マタ以奈美といふ名の元は天皇の別郎女を喚玉ひしに、辞奉りて島に遁渡りしより、辞妻嶋といひ、その別郎女、後に仕奉りしによりて、辞別郎女といひしなるへし。さてまた其処を辞郡とはいへるものならん。

到三阿閉津一供三進御食一故号三阿閉村二云々。

別府・古宮・本庄・宮西・西脇・八反田・一色・二屋・二俣・山之上・大澤・經田・古向・宮北・中野・野添、此村々みな今阿閉庄なり。此中に古宮・宮西・宮北の三村は高宮村の名のなごりか。別府は辰方五里十丁はかりあり。

於是御舟与別嬢舟同編合而云々。

この同編合而はムヤヒテとよみてよけむ。

勅云。此處浪響鳥聲其譚云々。

この其は甚のあやまりにて、ナミノヒ、キトリノコエイトカシカマシならん。

望理里

福沢・石守・西之山・手末・二塚・下西条・野谷・野寺・草谷、この村むら、今も望理郷と書てモリノ郷といへり。草谷は卯方六里四五丁。

長田里

備後・植田・粟津、此三村長田庄なり。また加古庄の内に長田村といふ村もあり。植田村は卯方四里はかり。長田村は辰方四里十丁あまり。

印南郡

御舟宿於印南浦。此時滄海其平風波和静云々。

此其に某歟と朱もて書たり。某にては何とよむにか。これも上の其譚の其と同しく甚のあやまりにて、イトタヒラカニナミカセナギテシツカナリなどにやあらん。また卅七丁託賀郡都麻ノ里都多岐の處にも我其恠哉とあり。これも甚とみてアレイトツタナキカモならむ。

大國里 伊保山 大石

神吉庄の内に大國村あり。卯辰ノ方二里はかり。○魚崎阿弥陀地徳長尾北山中筋南池北池、是に伊保庄なり。魚崎ももとは伊保崎なりといへり。(今魚崎村に伊保氏もあり)此南池村・北池村といふかやかて池の原の名の遺れるもの

なるへし。また村翁夜話集に云（此集は姫路藩福本博の編集なり）

御除地
一 然如龍王社

南池村 村中持

当村は前は池なるにて御座候。聖護院宮様西国へ御下り之節、右池を御覽被遊、大成池に候得は、龍王勸請致し可遣旨にて、然如龍王御勸請に被成下候由申傳フ。其後慶長十一年池田家御代々田地に開發南池・北池の両村出来候由、北池村慶長中新池村と云しよし也。時光寺領の證文に有之よし也。

大猷院殿御朱印にも新池村と有之よし也。魚崎は卯辰方三里、南池村は辰方二里半といへり。

○大石は石寶殿なるへし。

益氣里また八十橋

此は先年加古郡に物せしをり、此処彼處と尋ぬるに、誰ありて知る人もなければ、せんすへなくて、家にかへりぬ。さて和名抄を見れば、印南郡の内に益氣郷あり。其後播磨事始経曆考（宝曆五年に後藤基昌の著述なり）を見れば印南郡に八十岩橋といふ物を出して、註にはく、日本紀神代卷に八十橋あり。八十二神降臨のよしを記せり。今八十岩橋といふ。升田村に岩上自然に疊々としたる石階あり。當国の奇物なり。國分寺惠慶法師の哥に、幾世々の、かきりしらしな、むかしより、たえずぬかつく、八十の岩橋、とありと出せり。此記は信かたき事もあれと、印南郡の内に出したるは和名抄にも合て、いかにもいはれあり。さて升田村は加古郡と印南郡とのさかひに流れたる加古川より西へよりて、印南郡の内に升田庄升田村あり。さて其後に升田村の村人の來たるをりに尋ぬれば、いかにも我村の後にある一の山、中らよりいた、きにいたるまで石はかりなり。その石を切わけて階のかたちしたる処あり。されとそはいとくさかしくて、今おりのほりはしかたきといへり。さて升田といふは、益字マスともよめは、是より出たるなるへし。猶また斗形山より出たるにもやあらん。升田村より国分寺村へは西方三里はかり。姫路へは

西方四里。

含藝里

神吉カンキ・天下原アマカノ・中西・宮前・清水ト米巻・富木ト米巻・大國・長慶・砂部、此村ともは神吉庄なり。神吉は卯方三里半ほとなり。

飭磨郡

菅生里 飭西郡

書寫山の後なる六角・刀出・古瀬畑・芹田・塚本、此村々菅生庄なり。六角・刀出は戌亥方二里はかり。古瀬畑なとは戌方三里はかりあるへし。

【附箋】

○はりま鑑云、英賀村二祭ル処ノ神、英賀津彦・英賀姫也。古へ阿峨都彦領セシ処ナリ。延喜式二載ル処、英賀彦神ト申ハ、當地ノ氏神也といへり。姫路より一里半はかり未方なり。室泊よりは三里

半はかり在。少し南へよれり。

式二ハミエス。

英賀里 同上

英加・山崎・中濱・高町・付城・苦編・廣畑の七村、英加庄なり。未方一里あまりあり。

伊和里

(2) 飭東郡
飭西郡

右号伊和部者。積幡郡伊和君等族。到来居於此故号伊和部。所以号手苜丘者。近國之神云々。

栗山町・安田町・延末村・飯田村・栗山村・安田村・延末村、今是を岩東郷といひ(3)（手柄山も播磨事始経歴考に岩東郷とあり）中池村・町坪村・岡田村・井ノ口村・西脇村・玉手村、是を岩西郷といへり。伊和を岩(3)とかくは、假字たかひたれと、

後世の事なればいひかたし。されは姫路はもとより午未方一里はかりの間を伊和里といひし事しられたり。〈中池は午未方一里はかり。西脇・井ノ口は申酉方廿丁あまり。栗山・延末・安田などは十丁あまり。手から山へも十七八丁はかりあり〉○積幡郡云々。この郡、字は部の誤なるへし。積幡郡といふは何国にもなし。○近國は近江国などありたるにはあらぬか。近國とはかりひひてはきこえず。○手苧丘は上にもいへる手柄山の事ならんか。テカリとテカラとは似よりて聞ゆ。○右十四丘云々とあれど、かそへみれば十三なり。さては手苧丘を合せて十四となるにか。猶此次にみえたるには、船丘と花丘となくて、沈石丘と藤丘とありて、これも十三なり。〈経歴考に、藤岡、今の二階町にして、○同考に、桜木岡・藤岡、長者か屋敷なりしと云とみえたり。今の鬢櫛山の事なり。藤岡の女子を懸相してよみてつかはしけるといふ歌、さくら木の、岡の一夜を、あかしてそ、名残大井の、山のかんなき。また巫岡山、右の桜木の岡と同じ事にて、かんなき山ともいふ。○考にはミコヲカとかなつけたれと、今の鬢櫛山の事なるへしとあり。今はミコカヤマといへり。これや十四丘のミカ丘ならんか〉

【附箋】

一 遣ヤリテ二其子ソノコヲ汲水ミヅヲ未還カヘラサルサキニ以前即マデニ發船ツツシ遁去ニケサリ

○即ノ字ハサキニト云ニニアタル。○遁去ヲニケサリキトヨミテハ、遠ク去リ行タル心チノスレハ去ノ字ヲタ、ニニキトヨメリ。

一 汲ミヅヲ水ミヅ還カヘラ来ル見ミ船フネ發ツツ去シ

賀野里 飭西郡 〈是より次々飭西郡には西と記し、飭東郡には東としるせり〉

古知庄村・塩田村・杉ノ内村・高長村・神種村カシノ・前之庄村・新庄村・山ノ内村を賀屋庄といへり。古知庄村は亥方三里半はかり。山之内村は六里あまりもあり。

韓室里 西

和名抄にも辛室（加良辛邑）とあれと、飭磨郡の内にカラム口といふ郷も庄もさらになくて、龍野町新田・山畑・新在家村・今宿村北東西の三村、辻井・二村・田寺村・御立村・田井・坂元などを安室郷といへり。（当社長祿三年の御棟札にも飭西郡安室郷住人と大工の名をしるしたり）此安室、やかて韓室なるへし。カラといふを悪みて、安とかへたる物ならん。すてに神前郡生野は、もと死野なりしよしみえたり。猶伊波礼毘古天皇の太后の御名も然なり。

巨智里 草上 大立丘 西

上にいへる賀屋庄の内に古知庄村あり。○草上は播磨事始経歴考に、飭西郡草上郷新在家村蛤山高岳神社云々とみえたり。新在家村は上の安室郷の内にあり。いか、。然はあれと、安室郷の内なる龍野町新田・山畑は姫路の町つゝき、坂元は書写山の禁にて一里三十丁はかりもあれは、いかにそやおもはるゝ事もあり。また御立村は経歴考に、御館邑、後醍醐天皇書写山行幸の時の御旅館たりし由とみえたと、是は此処にある大立丘の名の移れるものならん。さらは草上は御立村あたりなるへし。

【附箋】

また飭西郡新在家村は西戌方にて十丁はかり。今宿は東西北と三ありて、戌亥方廿丁あまりあり。御立村は戌亥方にあたりて一里余もあり。さて此村々、みな今安室郷なり。また、西今宿村に山吹新田といふ処もあり。はりま鑑に、草上寺安室郷山吹野二有寺跡。又云、草上ノ地、今ハ今宿村ト云。草上トハ、今蛤山ノ上ノ方、野原成へくとあり。また蛤山は同し鑑に、高岡社安室郷。一名蛤山。祭神應神天皇・仲哀天皇式内・崇道盡敬天皇・事代主命・猿田彦大神式外、是古旧地草上郷新在家村西八帖岩ノ山庄也ともあり。是によりておもへは、御立村は後醍醐天皇書写山行幸の時の御旅館なるによりて、御立村といふ

との説あれと、然るにはあらで、此處にある大立丘を後に御立といへるものなるへし。

方角里数を拵たるは姫路よりなり。

付箋
安相里

繼庄奥山村に麻生山といふ山あり。八幡宮ませり。此山やかて英保村の山につ、けり。此文に、娶英保村女とあるにも合へは、此麻生山の事なるへし。是によりてまた長畝川を奥山村人に尋ぬれば、村より半道はかり西にあたりて池のこつくなれる処あり。此ところ長畝川の筋の残れる処なりと村にいひつたへたりといへり。

奥山村は卯方にあたりて一里あまり。英保村は卯辰方十七八丁。繼庄繼村もまたいとちかし。(朱註)はりま鑑には三野庄奥山村とあり。

枚野里 新羅訓 東

国衙庄の内に平野村白国村あり。平野は亥子方三十丁はかり。白国村は子丑方十丁はかり。姫路よりいとちかし。神名帳考證に白國神社五十猛命、日本紀云、五十猛神降於新羅國云々とあり。峯相記に、四宮白國大明神者。日域開闢垂跡申傳人皆不知。或説開化天皇第一姫宮云々。一説飾東郡国衙庄白国村社者廣嶺山。神官相傳曰、白国者新羅也云々。統ては信かたけれと、新羅といへるは由緒ありてきこゆ。

大野里 砥堀 東

大野村は国衙庄の内にあり。また姫路・天神町・橋元町・野里寺町・威徳寺町・福元町・米屋町・橋元新町、これみな、今大野郷なり。○砥堀、神東郡蔭山庄に属て、上砥堀・下砥堀と二村あり。子丑方一里二十丁はかりなり。

少川里 豊国 東

大野郷の内に小川村あり。寅方二十丁はかりあり。○豊国は寅方一里あまりあり。此豊国村の郷名も庄名もしれ

す。谷外内の豊国村とあり。

英保里 東

大野郷の内に東阿保・中阿保・西阿保と三村あり。卯辰方にあたりて十四五丁あり。

美濃里 継潮 東

深志野・御着・国分寺・山脇・坂元・上鈴、是村々を今三野北條庄といひ、北原・妻鹿・兼田の三村を見野南條庄といへり。深志野等は卯辰方一里はかり。妻鹿・兼田、巳午方一里あまり。北原は卯方にあたりて一里はかりあり。○継潮は継庄継村あり。是か。此も卯方にて一里あまりなり。

因達里

経歴考に、射楯兵主神社、饒西郡辻井村東の山と挙たるは據ありての事か。

安師里 東

今、西川庄阿成村といふ村あり。午方一里はかりにあたり。

漢部里 阿比野 手沼川 里名詳於上右稱多志野者。品太天皇処之時云々。 西

この処字の下、之字の上に朱もて行字を補へり。是によりて猶おもへは、処巡のあやまりにて、巡行之時なるへし。此記中に、品太天皇巡行之時といふ事かすくあれはなり。○阿比野、書写山の禁。東坂元村より西、少し南へよりて會野といふ處あり。姫路よりは申西方一里半はかりもありぬへし。○手沼川、今の手野川なるへし。姫路より西方一里あまりあり。阿比野手沼川と並ひたるによく合へり。

因にいふ、此郡のはしめに漢部里⁴ありて、また此處に漢部里あれば、二里のさまなれと、里名詳於上とありて、異事にもあらねは、猶一里の事なるへし。それをいかとなれば、上の漢部里を挙たる條に多志野・阿比野・手沼川の

事をもいふへきに、其処にもれたれば、一郡の事いひをへたる末に挙たるものなるへし。次の馬墓池の事も、貽和里の條にいふへきを脱たるによりて此処にいへり。

揖保郡 事明下 伊刀嶋諸島之総名也。名品太天皇云々。

此名字は、亦の誤なるへし。名にては更に聞えず。亦とみれば此処の件明らか也。

香山里 家内谷 佐々村

揖東郡
揖西郡

新宮の北に香山村あり。室よりは四里はかり北方なり。○家内谷平野と千本駅との間にカナイ谷といふ処あり。香山村・佐々村は揖東郡、カナイ谷は揖西郡なれと、程遠からねは是か。○今香山村近き処に佐々村あり。林田よりは西戌の方一里あまりあり。新宮よりは東にあたり。

△栗栖里 阿為山

越部里 狭野 神阜

揖東郡
揖西郡

齋崎の駅路あたり、統て越部庄也。此庄の内に市保村といふ村あり。此處に俊成卿の女越部禪尼の御墓あり。寛延三年齋崎村石井某上冷泉家へめされし事あり。○狭野村は立野より二十丁はかり北にあり。○神阜、此はたえてしれされとも、此あたりの事をつらく考ふるに、繪圖にも挙たることく、此越部庄の内に一の山(今新宮の陶器をやく処なり)なん有ける。此山のかたち、似覆とあるによく合ひたれば、是ならんとはおしはからるれと、いまた正しきものをみす。(越部庄は揖東揖西にわたれり)

【附箋】

はりま鑑に、栗栖湯、今絶ニヤ。考二龍野領二栗栖川有。牧谷より出テ佐野村ニ至リ伊保川ニ入とあり。

【附箋】

△阿為山は千本と三日月との間に相坂といふ峠あり。此処は揖保佐用のさかひなり。阿為と相とはかな違ひなれと、そは後の事なるへし。其上此あたり栗栖庄といへるにもよく合ひたれば、正しく是なるへし。先年三日月に物しける時によめる哥あり。

相坂の、手向をすきて、我くれは、夕きりたちぬ、三日月の郷トヨメレト、今ハある山のトス。

【附箋】

注 出雲国阿善大神云々この上に神阜所以号神阜者とか、またはた、神阜とはかりにても有へき處なり。脱たるなるへし。また万葉集の仙覚注に、故号神集之覆形とあるは、阜と集と混ひ々形とある々の之にかひ形と覆と上下にまかひたるものなるへし。さて是は何れをよしとも定めかたけれど、仙覚注に、此諷諫山上来云々とあるは、此欲諫止のあやまりなる事は明らかならは、これにひかれて神阜の方をよしとす。

日下部里 立野 西 運傳上川礫

室泊より子丑方三里なり。附箋「はりま鑑龍野御領主由縁之処に、或記曰、貞觀年中播磨守日下部朝臣村雄晚年二龍野入道昌泰ト云人、當地二居住スト云へり。また旧跡之処に龍野貞觀年中大蛇此山に居し、洪水此時、当寺（和書）村（和書）記ノ材維其蛇を殺すともあり。」運傳上川礫云々。此はもと上と川と下にて、運傳上川礫云々とありたるにはあらぬか。

【附箋】

日下部里 因人姓名為名

岡平保『播磨風土記考』翻刻（上）（近藤）

これもいか、是も次の上岡里、

林田里など、同じ

くまきれみたれ

たりとみゆ。

上岡里

本村
田里 東

林田里

本名 談奈志 松尾 伊勢野 東

此二里、いと混らはし。上岡の名は此記の成れる頃の名にて、林田の名はそれより先つかたの事なれば、いとふるし。又林田里は此記の成れる頃の名にて、談奈志はそれよりふるき方の名なり。されは今林田といふは、談奈志の方の林田なるへけれど、さもいひかたき事もあり。また聊の據もあり。仰賀茂神領の林田庄の堺を、先年林田人三村利兵衛と云者（是は三村左京進とて、神領に附たる者あり。その裔ときけり）平保か家に書記しておこせたるものあり。其中に東は石の藤兵衛山の尾より峯きり、すがふとの境は堀きり、ごじとの堺は二つ岩、宍粟とのさかひは仙人場云々とあり。此すかふといふは、菅生にて飭西郡菅生里の條にいへることく六角・刀出・古瀬畑・芦田・護持・塚本の六村、菅生庄にて菅生山邊故曰菅生とあるにもよく合ひ、ごじはやかて此菅生庄の内にあり。その上この塚本より林田の町へは二里はかりあれば、上岡の林田、是今の林田なりともいふへけれど、さては此記に本名林田里とあるに立かへりて、その本名をいへるもいふかし。猶また今林田ノ里をニレの里といへり。かくては談奈志といふ方なりとも思はるゝなり。○松尾は、鵜村の少し東北に今松尾村あり。○伊勢野は、今の林田より立野へ行道の中らに伊勢といふ處あり（林田より立野へは二里なり）てとりくゝに混らはし。此ははやくも此記の成れるころすら林田名二つあれはまかふも説なり。

【附箋】

上岡里。本名林田里トアレト、此名ノ縁ハナクテ、曰菅生。一云曰宗我富トアルハイカニ。又次、林田里。本名談奈志トアリテ、其談奈志ノ事ハカリ拳テ林田里ノ事ライハヌモイカ、。イトくマキレタルモノ也。

又上岡里。〈~~~~〉上中下。菅生山ノ邊ナリ。故曰菅生ニカクアレトモ菅生山辺ナランカ。

邑智驛家 泳山 蒲阜 東

附箋に
○—○はりま鑑に、青山ノ西、大市郷石鞍村、大市郷西脇村。また道法

○—部所には大市、今大市郷相野村・中村・廣坂・松尾辺ナリとあり。

或人云、姫路より二里はかり西に山田村といふ村あり。〈西海道往來筋なり〉此山田村の北方に大市と云村あり。立野の東、けやき坂の東にあたりて、立野よりは二里あまりありといへり。されは泳山は立野の日山の事にはあらし。
○蒲、この字、月令・高橋氏文にも蒲とあり。

廣山里 麻打里 東

廣山村は鶴村より廿丁はかり。戌亥方なり。○麻打里、今此名しれす。さて廣山村より十二三丁午方に阿宗村あり。〈経歴考には廣山庄阿宗村とあり〉阿宗は記中巻〈開化天皇條に〉次息長日子王。三柱。此王者吉備品遲君針間阿宗君之祖とあり。神名帳揖保郡阿宗神社ともみえて、いと古き處なるに、此記にみえすて麻打里あるは何とかうたかはし。

【附箋】

麻打里、今此名しれす。廣山より十二三丁南の方に阿曾村あり。阿曾是記中巻開化天皇御子迦迓米雷王。此王娶丹波之遠津臣之女。名高材比賣生子。息長宿祢王。此王娶葛城之高額比賣生子。息長帯比賣命。次虚空津比賣命。次息長日子王。三柱。此王者。吉備品遲君針間阿宗君之祖とあり。神名帳揖保郡阿宗神社ともみ

えて、阿曾の名いと古(宋筆)きに、此記にみえず。さて今廣山村まちかき処に、阿曾村あれば、是は麻打の轉り偏(文)りて阿曾となれるならん。アサウチシナレツニ チヲ省ク。

【附箋】

廣山里旧名握村トアリ。今二塚村アリ。是ハ処タカヘルカ。ヨク尋マホシ。

枚方里 御立草 東

上にいへる阿宗の南にて、正条駅より廿丁あまり東なり。鶴村よりは十二三丁はかり北、すこし東へよれり。

附箋 ○はりま鑑に、立岡村廣山庄、古老ノ説ニ、昔此処ニテ春麥ヲカリ、害ニ過ル者有ト云。今考ルニ、太平記ニ

云ヘリ小山太郎高家ナルヘシ。義貞、立岡山ニ陣營ノ時カとあり。また笠山ノ陣(宋筆)鶴庄内山村、建武中新田義貞白旗城攻ノ時、シハラク爰ニ陣營スト云ヘリ。今内山村ノ山上也。所ノ者、山下ヲ屋シキ段ト云。或ハ立岡山トモイヘリとあり。廣山村・鶴村・内山村、みなつゝきたる処なり。さて此立岡村といへるか、御立岡なるへし。枚方も鶴より北東にて十武三丁はかりなればなり。

大家里 与富等 東

手本驛路あたりに、大屋村といふおあれと、是にはあらて、此次件に請大田村与富等地云々といふ事のあるをおも

へは、大田里程遠からぬ處なりとそおしはからるゝ也。さてまた与富等よほろみといふ事によりて猶考ふれば、今丁村とか

きてヨウラウ村といふ村あり。丁村をヨウラウ村といふは、和名抄に近江國浅井郡丁野(文)（与保乃）といふ郷名あれ

は、此丁村はヨホロ村(文)の訛りなるへし。大田村の南方にあたりて、遠からねは此処にある与富等によく合ひたり。

されは大家里も此あたりなる事は論ひなし。石海里條ニ造宮於大宅里關井此野とあるにもよく合へり。

大田里 鼓山 東

林田より東南方凡二里はかり。○鼓山、林田より菅生庄の塚本村へ行道に大鼓(ホト)といふ處あり。是か。

石海里 宇須伎津 宇頭川 絞水之淵 伊都 雀島 己之負子而云々。

和名抄揖保郡石見(伊波美)とあり。今も石見庄といへり。さて此石見庄は、揖保郡の東西にわたりていとくひろし。○宇須伎津は、今宮内村に坐八幡宮を宇須伎濱宮とも、また津宮ともいへり。○宮内村は我室泊よりは東にあたりて

二里あまりあり。此津宮より十四五丁西に津市場村といふ村もあり。○津宮、また津市場の津はうすき津の津より出たる名なるへし。

○宇頭川、或人云、宇頭といふ川は、馬場村より出て市場村・萩原村の間をなかれ、下は梶山の禁をなかれて上河原村より揖保川に在るといへり。○馬場村は室津より東北にあたりて、鳩の峯といふ峠の先にて、一里あまりあり。さらは絞水之淵

も此邊りならんとよく思ひめぐらせは、揖保川は正条の西、山津屋村の南の山下を流て萩原の南、梶山の北側の禁(10)になかれて行あたり、それより少し東へなかれて、また南へなかるれとも、付箋「いにしへは、山津屋村の山下より西へ式丁もなかれ入こみて、夫より折まかり、また南へ壺丁はかりもなかれて、梶山のふもとを東南へなかれ出

るなり。此折まかりたる處か。やかてうづまく淵なり。」是によりて猶熟考ふれば、宇頭川といふは此揖保川の事にて、馬場村より出る小川をいふは後に移りたるものなり。かくて宇須伎津の西といへるにもよく合ひたり。○揖

保川源は但馬・因幡の二国より出たる大川なるに、そを除て、それより西なる小川を取出していふへくもあらず。されと、うつ川の名の遺りたるは、いとめてし。○伊都村は、宇須伎濱宮より七十丁はかり西方なり。室泊よりは七まかりといひて、室山の禁、波打

際を東へめぐりめぐりゆけは伊都村なり。○今伊津とかけり。此七曲の間一里にちかし。○雀島、今シ、マといひて、伊津浦に属する一の小嶋あり。此島草木生ず。シ、マといふはス、メシマを云ひかめたるものなるへし。○於是有一

女。人為資上己之負子而墮於江。故号宇須伎(新辞伊波須久)この件聞えかたし。是は而宇、江字の下にありて、次に宇須々伎々。故号宇須伎と有たるか混ひたるなるへし。伊波須久のいはははけなし。いはけてなどのいはかす

くはうすゝくのすくと同じことにて、やかてうすゝくと同じ意はへの詞なるへし。又伊波の波は須の誤か。さらは伊須々久にて字須々久と同言なり。○召石海人夫は紀應神卷十四年二月云々。因以奏之曰。臣領已國之人夫百二十縣而云々とあるによれば、こゝもイハミノミタカラともよむへけれど、然訓んよりイハミノミタミともむかた、まさりてきこゆ。

浦上里 室原泊^① 家嶋 韓荷嶋 高嶋

和名抄に浦上（字良加三）とあり。経歴考には浦上庄萩原村とみえ、はりま鑑には浦上とかきてウラカベとかなづけあり。また永祿の頃、室城主に浦上美作守政宗といひし人もあり。また或人のいへるには、市場村・萩原村を浦上庄といふなりといへり。〈此市場、萩原は、浦辺村の隣村にて、室泊よりは一里あまり北東の方なり〉さてまた嶋々も此次第にあれば浦上里の内か。然らば神島は今の上島の事にはあらで、此あたり近き處、または家島に属る多くの島々の内なるへけれど、はやく其名のたえたるものなるへし。〈今の上島は多くの島々の上のはしにある故に上島とはいひけるものなるへし。またかめ島ともみなふし島ともいへり。室泊よりは八里はかりある處なり〉○室原泊〈中臣連胤は原の字衍かといへり〉こゝに一の考へあり。本朝文粹に一重請修復播磨国魚住泊事。右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行の程。自櫻生泊至韓泊一日行。自韓泊至魚住泊一日行。自魚住泊至大輪田泊一日行。自大輪田泊至河尻一日行云々。延喜十四年四月廿八日。從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事とあり。此文によりて考ふれば、櫻生泊は正しく室泊の事なり。然るに此記には室原泊とあり。是をいかにとおもひて、よく思ひめぐらせは、浅茅生の小野の篠原しのふれと、もあれば、生といふも原といふも心はへはし事なり。また田をフともよめは、原をもフとよめる事もあらんかと考へて、秋元安民にとへるに、安民のいはく、万葉集に原をフとよませたる処、一處ありといへり。されば原は衍にはあらで、室原泊といふか。全き名にして室泊といふは略たる名なり。

【附箋】

檉生にヤギフとかなつたは、この字ムロノキ、またカハヤナギといふ訓もあるより、柳はアラヤギといひ、また苗字などに柳生をヤギフといふも有より、檉生にヤギフと假字つけたるものなるへし。

【附箋】

万^ノ略解二、

和名抄東生郡味原郷あり。

原をふとよむは、茅原^{チフヲ}

原の類なりとあり。桓武紀

撰津国鯨生野と有^(宋書)とみえ

たり。

◎因にいふ、韓泊は檉生泊より魚住泊までの中らにありぬへきを、今その名たえてしれす。強ていは、今の福泊の事ならんか。是は飭万郡韓室と同じ類に名のあしきを嫌ひて、韓を福にかへたるにてもありぬへし。⁽¹⁵⁾へかくみる時は、一日行とあるにもよく合へり。我室の浦はの鳴島・屍嶋もいつの頃よりか、きみ嶋・かつら島といへり。是も其名のあしきによりて改たるもの也。◎さて追考記（元和年中に室津の事を記せる書也）に山三方をかこみて往来の客船風波の難をしのき江中静謐なりければ、室中に異ならずとて、室津と名付そかしなりとあるは、此記に所^二以号^レ室^一者。此泊防^レ風如^レ室。故因為^レ名とあると同じ事にていとめてたし。〈韓荷島のいひ傳へも此記と同じさま也。そはそこにいふへし〉御津・白貝浦、此二の名、今絶てなければ知かたけれど、室津の内にありぬへし。〈室津といふは、東は伊津村にさかひ、西は赤穂郡の堺にいたるまで室津の内なり。此間二里にあまりて浦々多し〉鳴島・屍島のなきはいかにそや。此記の成れる頃は、

此二島ともに赤穂郡に属るか。今も鳴島は揖西・赤穂の二郡に度り、屍島はみなから赤穂郡に属り。さてまた中昔に室といひしは、今の我産土わたりのみの事にはあられて、揖保川の西、濱田村・刈屋村あたり。また河内谷（河内谷とは馬場村より東し揖保川より西をいへり）（○濱田・刈屋は室より辰巳にあたり河内谷は子丑にあたり）これらみな室といひしならんとおもふ事、寛治の頃より嘉吉の頃までのものに據あり。事長ければ此處には略しぬ。（此事は社記に委しく論へり）

【附箋】

追考、御津と室原泊とは二所にはあられて、一処にして名の二ありしか、まかひたるならむか。（名の二ある事は、此巻にかすくあり）いかにとなれば、防風如室とあるいとよき泊をおきて、異浦に御船の泊玉ふへき事もあるまし。されはこゝはもと所以号御津者。息長帯日賣命宿御船之泊。故号御津。亦所以号室原泊者。此泊防風如室。故因為名とありたるかまかひたるものならん。これによりてまた一つおもふ事あり。室津といふは、船の泊なれば室津なりといひて、事もなければ、此処は船の泊を津といふ。その心はかりにてはなしにもしは室原の室と御津の津とをとりて室津といふにはあらぬか。一浦にて二名ならんと思ふより、またかくもやとおもふ。

【附箋】

里の名などには、本名何といふ事、かすくあれと、一村の名などに本名何といふ事みえず。されはこゝは、また所以号室原泊者。此泊防風如室。故因為名。亦曰御津者。息長帯日賣命宿御船之泊。在者曰御津トモなどにやあらん。

【附箋】

考室津有吉川次郎ハ

文治元年室津ヲ領ス。

栗栖庄千本村。

○家嶋は神名帳に、揖保郡家嶋神社〈名神大〉とあり。室泊より三里南方なり。○韓荷嶋は萬葉集卷六に、過辛荷島時。山部宿祢赤人作歌一首并短歌。味澤相。妹目不數見而。敷細乃。枕毛不卷。櫻皮纏。作流舟二。真梶貫。吾榜來者。淡路乃。野島毛過。伊奈美孀。辛荷乃島之。島際從云々。反歌。玉藻刈。辛荷島爾。島回為流。水鳥二四毛有哉家不念有六とみえたり。此からにの島といふ嶋、今三あり。其一は室の浦より南方十五丁はかりはなれてあり。三の中にてはいと大きく、東より西へはみしかく、北より南へはなかし。(東西五十五間、南北九十間) 島山のうへ、松木繁れり。是を今地の唐荷島といふ。また一はこの地の辛荷島より七丁はかり南へはなれてすこし西方によりてあり。此島は三の中にはいとちいさく(東西三十一間、南北廿一間) 是にも松生茂れり。これを中からの島といふ。さてまた此島より二丁はかり南に離れてあるを沖の韓荷島といふ。此は地の辛荷島よりちいさく、中の辛荷島よりはいと大きく(東西四十二間、南北六十間) て、此島にも松おほかり。さて此沖の辛荷嶋と中の韓荷嶋との間、潮みつれば小船などは行かよへとも、潮ひる時はかなたこなたひとつに連けり。かくて此島ともを辛荷島といふ由緒は、室津の云傳へとて真柴かる山賤いさりする海人などのいふには、むかし唐船、此辺にてあらき波風にあひたるに、其船に積たる物を此島に揚しにより加良美能島といふといへり。おのれはしめには、あちきなき事いふ者かな。唐荷とかきたる文字につきて、こさかしき者のおしあてにいひ出たるを、またいひひかめて、からみの島といふは、あはれをこのものかなと、嘲けりしに、其後橘千蔭か物せし萬葉集略解をみれば、播磨風土紀に韓荷島云々と挙たるを見て、さてはとおもひて彼やしき者のいふ事も古事にてうきたる事にはあらずと、いとく尊人もめてたく

もおもひぬ。へざれと、からみといふは、なほ訛りなり。○辛荷島の云傳へ事のうきたる事ならぬによりて、此あたりの島々を先年考へ物したれば、ちなみに此處に書つく。△鳴嶋、今は君島といへり。萬葉集十二卷に室之浦之湍門之崎有鳴島之磯越波爾所沾可聞。此島は室より二十三丁はかり西方、すこし南へよれり。また辛荷島と隔ること一里にちかし。△屍島、今かつら島といふ。名寄に俊成卿むかし人いか成る屍さらされて島の名にしもおひやしぬらむ。此かはね島は啼島より少し南西へよれり。此間十五丁はかり離れて、啼島より今一きは大きな島なり。此島、我屋戸わたりより見渡すには、前なる啼島にいさ、か重なれり。○△生嶋、夫木抄に、朝夕に、さためなき世を、なげくには、生嶋にこそ、住へかりけれ。是は赤穂郡坂越浦に附て、上のかつら島よりは一里はかり離れて大きさも啼嶋よりはこよなく大きなり。山のうえより水際まで種々の木ともいたく生茂れり。中らには此坂越浦にます大避大神の行宮あり。地方より隔たる事二丁はかり也。○△唐船島、是も赤穂郡御崎村に属けり。東より西まで僅に一丁はかり。北より南へはそれより短し。此より地方まで、今は塩竈浦となりて嶋にあらず。上のかつら島よりは二里はかり西方なり。さて此島の事、赤穂郡に云傳へたるには、からせんと名つくるよしは、むかし唐國の船あらき波風にあひ、此邊りに漂ひ来て終に此處にてうつふしに伏しつみしか。後に一の島となりたる也。然るによりて此上にあかりて是にちからをいれて踏めは、今にうつらなる音すなりといへり。○△取揚嶋、この嶋は備前國のさかひにありて、赤穂郡の内なり。からせんよりは二十六七丁はかり西方なり。大きさは上にいへる中の辛荷島ほとんちいさき嶋なり。さて上の韓荷島より此島までを取つていふ。先からにの島もからせん嶋も、ともに唐船の漂ひし古事をいひつたへたり。此方彼方同じさまの故事を云傳へたれば、是は同しをりの事なるへし。されは此外の嶋々の名とも、おなし故事よりおへるならんとそおもはる。抑啼島といふは、其韓船の漂ひし時に、韓人どもの此島につきて啼かなしひたるによりて啼島といひ、屍島とはそのから人ともの中には水に溺れて死しもあるへし。其

死屍を此島にをさめしよりかはね島といひ、(または死屍ををさむるまでにはあらで、此島に取あけし故の名にてもありぬへし) 生嶋とはやうく、此島まで漂ひ来て生たすかりたるよりの名なるへし。さて其船は今のからせんあたりにて、うつふしに伏しつみたれば、其船の物ごとくに浮なかる、を取揚しによりて、取あけ島とはおへるなるへし。○高嶋は家しまの西にあれば、西の高島といへり。○伊刀嶋、この名しれす。今ふと島といふしまあり。訛りか。

萩原里 韓清水 陰絶田

是は萩原なることは論ひなし。さて萩原村、揖保川の東なるは、室より一里半はかり。また上の浦上里の條にいへる萩原は川西にて是よりちかし。此萩原村は川の東西にわたりて、二村となれり。いづれも宇頭川の泊ちかきあたりなり。故つらつらおし考ふるに、石海里の條に御船宿於宇頭川の泊とあるも、此處に御船宿於此村とあるも、やかて同し處ならん。然るを石海里(本巻)の方は帶日賣命韓国に出ませる時の故事をいひ、此処なるは帰り来ませる時の事をいひ傳へたるによりて、二方にあれど、泊は同し泊なり。さて宇頭川の條にいへる梶山の南側の替あたりに碇岩村・中嶋村といふ村あり。此二村の事を石海里わたりに云傳ふるには、むかし此邊海にてありし時、船のいかりの岩にかゝりし處なるによりて、此處を碇岩村といひ、また中嶋村は嶋なりしによりて、今中嶋村といふなりといひつたへたり。よく合へり。○韓清水陰絶田、今浦辺村より三丁はかり北に清水といふ處、また大久保といふ処(本巻)もあり。萩原村よりは北西にあたりて、五丁はかりあり。韓清水・陰絶田の名残りか。○傾田、阿曾村の西門前の少し北に片吹村あり。正条よりは廿五丁はかり東なり。

少宅里 東

和名抄に揖保郡小宅(本巻)(古伊倍)とあり。今堂元(本巻)・宮脇(本巻)・中村(本巻)・北村(本巻)・高田(本巻)・井ノ上(本巻)・常全(本巻)・片吹(本巻)、是村々を小宅庄(本巻)といへり。正条より一里はかり丑寅方なり。中村・北村などは片吹より一里も北也。

揖保里 東

正条の南川向ひなり。

出水里 西

今此名しれず。和名抄にもみえず。さて立野の西方にあたりて清水村といふ村あり。正条よりは北方、少し西へよれり。此清水村の北の山のうしろは越部庄なり。かれ此記、北方越部村云々。南方泉村云々とあるをもて考ふれば、出水里は立野の西、琴坂の東にあたり。かくて此清水村あたりか。立野の西、琴坂の東にあたれば清水村といふか。出水村の名のまかひたるものなるへし。

桑原里 琴坂 西 今も琴坂は桑原の内なり。

上にもいへることく、立野より一里はかり西方に琴坂あり。されは桑原里は此あたりなるへしとおしてしらるゝ也。此こと坂のかたはらに三味線峠といふ處もあり。是は琴坂によりて後に設けたる名なる事おしはからるゝ也。

【附箋】

桑原 はりま鑑には、桑原庄竹万村とあり。また新宮ハ越部庄とありて、新宮瀧ハ桑原庄とあり。是は新宮と新宮瀧とは別なり。今名高新宮里は越部庄、新宮村は桑原庄也。瀧は新宮村にあり。

〔頭注〕

- (1) 大野村ハ姫路ヨリ卯方四里ハカリ。
- (2) 總社伊和大神とあるも、此記によりてしらる。
- (3) 伊和里は飭磨郡の東西にわたれり。

(4) この漢部里に、土の上中下をいはさるもこの故也。播磨御宅、今三宅町あるによりておもへは、こも伊和里條にいふへきをもらしたるによりて、こ、に出せるなりとそおもはる、。

(5) 市保ハ

安保ニハアラスカ。

安^ア

市^シ

(6) 附箋二、

及沢田村、伊勢村など神岡庄といへり。また林田の辺に屏風岩といふ岩あり。此処を上岡といふよし播磨鑑にみえたり。又沢田は今の林田の南隣り。伊勢は西にて是もちかし。

(7) 丁ハヨホロト云。

(8) 丁村と宇須伎濱宮トハ十四五丁ヘタ、レリ。

(9) イシノウミとかなつたは、連胤の石見イシミの名の有事をしらていへるものなり。石海にてイハミとよめり。

(10) 金剛山村ナル岸某カイヘルニ、堀上アタリヨリ二丁余リモ西へ入込タル川ナルヲ、二百年ハカリモ先ノ事ニヤ、堤ヲツキテ今ノ如クナレルヨシニ聞ツタヘタリト云リ。

(11) 室泊と辛荷島とは揖西郡、家嶋は揖東郡なり。

高島は家島に屬たれば、これも揖東なり。

(12) 魚住は万葉卷六ノ名寸隅の船瀬ゆ見ゆる云々のナキスミの誤ならんと播磨日記槻の落葉にいへり。

(13) 本朝語園七卷ニ曰、元正白髮八幡樂人元正當官領備中国吉保川ニ下向シテ上洛スルトキ檉生ノ泊ニテ

岡平保『播磨風土記考』翻刻(上)(近藤)

(14) 万卷十一

櫻麻乃葶原乃下草云々。

(15) 此記に死野を生野とかへたるも同し。いともかしこかれと、伊和礼毘古天皇の太后の御名も同し例なり。

(16) 室泊七月踊の歌に、御崎のな御崎のな、あこのみささきの、からせしま、根からはえたる浮島か、とこたへり。此哥いつの代に誰かつくれるといふことをしらす。

(17) 古伊倍といふよりヲヤケといふ方まされり。

(こんどう さちこ・皇學館大学大学院文学研究科博士後期課程)